

有珠山総合観測班の観測体制*

火山噴火予知連絡会

有珠山外輪山の東縁に設置されていた室蘭地方気象台の地震計によれば、1977年8月6日03時30分頃から火山性地震が群発して、その回数が増加して行った。同気象台は6日中に火山情報を3回出して注意を喚起した。6日午後には、臨時地震観測班が、札幌管区気象台から1班、北海道大学理学部から3班現地に到着して、有珠山周辺山麓で観測を始めた。7日09時12分に火口原内小有珠付近から噴火が始まったが、7日には室蘭地方気象台及び札幌管区気象台は、噴火の始まる前に1回、始まってから5回の火山情報を出した。その後、噴火活動の進展に伴って、8日から12日までに計12回の火山情報を出した。気象庁火山機動観測班は9日及び10日に到着して地震観測を開始し、また、東京大学地震研究所及び東北大学理学部からも地震観測班が12日及び13日に到着して、有珠山周辺に地震観測網を展開した。北大理学部は8月12日以降、集中記録方式による地震観測を目的としてテレメータ網の準備に着手し、また地殻変動調査も開始した。

火山噴火予知連絡会は、8月8日気象庁において緊急幹事会を開き、有珠山噴火に関する統一見解を発表した。そして8月13日には、現地において下鶴委員を会長代行として、渡辺、横山両委員に加えて、勝井北大教授、長谷川東北大助教授及び清野札幌管区気象台主任技術専門官を臨時委員として、火山噴火予知連絡会有珠山総合観測班が設立され、壮瞥町役場において第1回打合せ会を開き、有珠山活動の現況について統一見解を発表した。

この後、現地総合観測班の事務局を壮瞥役場におき、予知連事務局（気象庁）から担当者が派遣されて、観測班内の連絡・調整及び外部に対する広報に従事した。各観測班の代表者は毎日9時に事務局に前日までの観測結果を持ち寄り、これを検討・議論して見解をまとめ、10時に関係自治体の災害対策本部、警察、自衛隊、国鉄等の関係者と会合して、火山活動に関する情報を伝え、資料を配布した。その後、11時から報道関係者とほぼ同じ内容を以て会見した。このような毎日のプログラムは8月14日から10月15日まで続けられ、その間、8月20日、9月8日にそれぞれ火山活動に関する統一見解が発表された。なお、10月11日の第11回火山噴火予知連絡会においても統一見解がまとめられた。

10月16日以降は、報道関係者からの希望により、定例会見を毎週金曜日午後とすることにし、必要な情報は何時でも現地事務局及び札幌管区気象台で入手できるようにした。ただし、災害対策関係者との会合は従前通り休日、祝日を除いて毎日続けられている。

総合観測の分担・構成は次の通りである：

1. 地震活動

気象庁（地震計3点）、北大理（10点集中記録方式）、東大震研（加速度計4点、電磁式地震計1点）、東北大理（三豊にて4点観測）。

特に、気象庁は地震総数及び震度を取りまとめ、北大理は震源決定を行なっている。また、東北大理

* Received Feb. 8, 1978

は、秋田県仁別地震観測所においても、地震放出エネルギーを積算している。札幌管区気象台は地震規模をまとめている。

2. 地殻変動

☆水準測量：広域は国土地理院、狭域は北大理・京大防災研

☆傾斜観測：北大理・東大震研・京大防災研が計5点に傾斜計を設置している。

☆辺長測量：北大理（16測線）、気象研（10測線）、東大震研（3測線）

☆高度角測定：北大理が伊達市から火口原内各点を測定

☆三角測量及び空中写真測量：国土地理院

3. 熱異常

☆空中赤外映像：文部省関係（2回）、気象研（4回）

☆地上赤外映像：北大理

☆噴気孔・試錐孔の温度測定：北大理、気象庁

4. 電磁気現象

☆全磁力測定：北大理、地磁気観

☆火口原電気抵抗分布測定：北大理

5. 重力変化

北大理が水準点を含めて28地点で精密測定を繰返している。

6. 噴出物・地表異常・地形変化

北大理（地質学鉱物学教室）は定期的に現地調査を続けている。

7. 火山ガス・地下水

東工大理、東大理

（ 横 山 委 員 ）